
魔法少女リリカルなのはStrikerS空我～青空になる～

kei=megu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS空我く青空になるく

【Nコード】

N30430

【作者名】

kei||me||gu

【あらすじ】

五代雄介。ベルトが復活し、2000個目の技を取り戻した彼がオーロラをくぐり行きたいのは、魔法が存在する異世界だった・
・
キャッチコピーは、

A next legend. A hero, KAMEN R
IDER KUGA, returns.

英語・・・嫌いです・・・

＊注意。平成ライダーは全部出てきます！クウガオンリーでは無い
です。が、雄介が主人公です

はじめに

これはクロス小説です。

注意

- 1、雄介最強です
- 2、ライジングアルティメット登場します
- 3、アルティメットが、ライジング装備を使います
- 4、ゴウラム健在です
- 5、アマダム復活してます
- 6、恋愛は多分ありません。ただ、憧れ(?)はあるかもです
- 7、裏設定として、雄介はライダー大戦を見守っていた、各世界のオリジナルライダー達と面識があるという事があります。
- 8、そのため、オーロラを使えます
- 9、もしかしたら、ライダー全員集合かもです
- 10、もしかしたらディケイドライダーズ、W、OOOも出ます
- 11、原作ブレイクはほとんどありません

1 2、HERO SAGAでの設定が出てくる事もあります

1 3、俺設定が多めです

はじめに（後書き）

以上の事を踏まえたうえで、お読みください。
・ ・ ・ それではどうぞ

ライダー対談e p 1 \ e p 2 編 (前書き)

D V D の対談をやってみました

ライダー対談ep1～ep2編

そこは、真っ暗な空間だった。四人の男女がパイプ椅子に座っている。

雄介と、翔一と、士と、なのはだ。

——この話（魔法少女リリカルなのはStrikerS空我く青空になるく）について

雄介「これは全ライダーがなのはの世界で暴れるっていうコンセプトらしいです」

士「それにしても、まだ二人しか出てないな」

なのは「にゃはは、まあ、おいおい出て来るってあの人が言ってきました」

なのはが指さす方向には、撮影機材を構えている愚者の姿があった。

翔一「俺は出ているうちに入るの？」

士「当然入る」

——設定について

翔一「なんか、五代さんが好戦的なんだけど？」

雄介「それは・・・禁則事項です」

士「なんでも、今後の展開に必要な伏線らしい」

なのは「にゃ！？いいの！？そんな事言って」

翔一「まあ、予測できないと思います・・・クウガを見てない人には」

なのは「？見た人ならわかるの？」

??? 「わかんないーいーい」

雄介「・・・今のは？」

士「読者の声だろう」

――ep1

翔一「五代さんって、ライダー大戦の時にゴウラム借りてたんだ」

雄介「うん。結局使わなかったけど。一条さんに久しぶりに会ったな」

翔一「・・・怒られてましたよね」

雄介「うん。置き手紙くらいしてから旅に出ろ！とか」

なのは「結構、度胸ある？」

雄介&ユウスケ「クウガですから！」

翔一「・・・幻聴？」

士「大体わかった。ユウスケの怨霊だ」

ユウスケ「違うって！士！」

椅子が一つ追加された。

雄介「やあ、小野寺君」

ユウスケ「あ、五代さん」

なのは「ハイパーショッカーってでてきたけど、あれって」

士「うん、痛い服装をした爺さんが頑張る組織だ」

ユウスケ「そんなこと言うなっ！！」

雄介と翔一となのはは苦笑い

——ep2

士「五代の好戦的(?)な一面があったな」

雄介「あれは・・・えー、なんというか、作者さんによると、『雄介成長フラグ』らしいです」

なのは「確かに。タグに成長ってあったし」

ユウスケ「五代さんが成長する意味あるの？」

翔一「ほら、普通ライダーが他の世界にいくと成長しないじゃん。だから、一回クウガ本編みたいに成長も入れるってさ」

士「五代が五代であるがゆえの成長らしいから、楽しみにしておけ」
ユウスケ「はいっ！質問。アルティメットフォームって出るんですか？このままだと赤の金で終わりそうだし・・・」

なのは「うん。あの威力でもゆりかご落とせるし」

士「!?!?こ、これは・・・」

全員、薔薇を口にくわえる。

全員『陳情・・・だな（ですね）』

———e p 3

翔一「え？まだ作者さんはチャプター1しか投稿してないよ？」

なのは「にゃ!?!? 本当だ!?!」

次回予告

スバル「アイス美味しい」

総司「おばあちゃんは言っていも「言葉の裏には針千本。千の偽り万の嘘。それでも良いなら・・・僕に釣られて見る？」よし、表へ

出る良太郎」

U良太郎「僕は男には容赦ないよ？」

ティアナ「私に聞かないで・・・」

総司「魔王式教導^{ちやうぎやう}？」

スバル&ティアナ「わーーーーー！！！」

魔王「ちょっと頭・・・冷やそうか」

総司「・・・」

ハイパーゼクター【Hyper Clock Up】

良太郎「天道さーーーーーん(さーーーーーん)さーーーーーん」

スバル「おおー！無駄なエコーだ！」

ライダー対談 e p 1 \ e p 2 編 (後書き)

そのうちスピノフするかも W W

Chapter 1、出会い（前書き）

後書きはオマケを主体にしようと思います。

OP 仮面ライダーダークウガ！

Chapter 1、出会い

未確認生命体0号を倒した同じく未確認生命体4号、すなわちクウガ、五代雄介は旅に出た。

これは、旅に出た彼が通りすぎた場所のうち、一つで起きた物語である。

episode 1 戦士

雄介は愛機、ビートチェイサー2000に乗って旅をしている。普通のバイクではない、このビートチェイサーには深い思い入れがある。共に戦った戦友だ。

ライダー大戦後、雄介はオーロラの使い再び世界の旅に出た。復活したアマダムは雄介を侵食する事なく、更に力を与えた。彼のパラレル―小野寺ユウスケーが示した新たな可能性、究極の闇を越えた存在にもなれるようになった。

「おやっさんのカレーも恋しくなったなあ」

雄介はバイクを走らせながら呟く。クウガのアマダムと呼応する緑の霊石、ゴウラム。それが変化してできた装甲機ゴウラム、別名「鉄の馬」、それは今は自由に飛んでいる。何故か？

ライダー大戦の折、貸し出しを頼んだのである・・・必要は無かったが。それで、なし崩し的に雄介が所持しているのだ。警察、何をしている？

シャアアアア

雄介はオーロラをくぐり、新しい世界にたどり着いた。それと同時に、激しい金属音が聞こえた。見ると、青い狼が叫びながら、機械みたいなのに攻撃していたり、赤いゴスロリ服でハンマーを持った少女も攻撃していた。

「そこの方！避難してください！」

金髪で、なにやら古風な服を着た女性に言われた雄介。でも、その瞬間、

ビュン

「ぐあっ!？」

「ヴィータちゃん！」

赤いゴスロリ服の少女、ヴィータが光線を受けて、血を流した。

「そこの方！危ないので早く！」

雄介は避難を勧められたが、

「俺は・・・っ。皆の笑顔を守る！」

腰に手を当てた

（なんでこんなところに一般人が？）

金髪の女性がそう思うのも仕方が無いだろう。雄介は見るからに戦闘とかには無縁そうな、平和的な顔の青年だった。そんな彼が死線を何度もくぐりぬけてきたようには誰にも見えない。

腰に、赤き霊石を埋め込まれたベルト・・・アークルが出現した。
「えっ」

金髪の女性が驚くのも無理は無いだろう。なぜなら、そのベルトは虚空から出現したからだ。

雄介は左手をベルトの前に腰の高さに、右手を左肩の前に持っていく、手を軽く曲げ、いつものポーズを取る。

雄介は右手を右肩の前に、左腕をベルトの左のサイドスイッチに

スライドさせながら叫ぶ。いつものように。その姿は多くの闘いをくぐりぬけた戦士だけの持つ風格を纏っていた。

「変身!!」

雄介は右腕を左腕にのせ、下に押した。確かな感触を感じるのと共に、両腕を開く。霊石は光った。腰を中心にして、体は変化していった。下半身は黒いが、逞しい筋肉に変化し、胴体は赤き装甲にかわる。頭部は大きな複眼と角がある物にかわった。

― 邪悪なる者あらば 希望の霊石を身に付け 炎の如く邪悪を打ち倒す戦士あり―

赤のクウガ・・・クウガマイティフォームが姿を現した。

「うおおおおりやあああつ!」

雄介がその機械に殴りかかると機械は大破した。

「大丈夫?」

「ったりめーだ。ガジェットを一撃で倒すなんて。お前、名前は?」

どうやら、機械の名前はガジェットというらしい。雄介は答える。

「今はクウガ」

「変な名前だな。あたしはヴィータだ」

雄介は周りを見渡し残りのガジェットの数が5体なのを見て、ヴィータのハンマーを手にとった。

「借りるよ・・・超変身!!」

「あ、アイゼンを返せ!」

ヴィータが怒るよりも先に、雄介はハンマー・・・グラーフアイゼンを手に取り、手首にあるハンドコントロールリングから発せられるモーフイングパワーでアイゼンを青いロッド、ドラゴンロッドに変えた。

― 邪悪なる者あらば その技を無に帰し 流水の如く邪悪を薙ぎ

払う戦士あり―

赤かった部分が全て青に変わり、装甲は形を変えた。青のクウガ、クウガドラゴンフォームだ。

しゃらん

雄介がロッドを降り、構えると同時に、鈴が鳴るような音がした。
「・・・はっ」

まず、目の前のガジェットを一突き、更に振り返って横なぎに二体破壊する

（残り二体）

雄介は心の中で数えた。だが、その二体は飛び去って逃げようとしていた。

「ごめん。ありがとう」

そう言ってドラゴンロッドをヴィータに返すと、ロッドはグラ―ファイゼンに戻った。

雄介は、バイクからあるものを取り出し、叫んだ。

「超変身!!」

その手に持った物・・・エアガンはモーフィングパワーで形を変えた。緑色のボウガン、ペガサスボウガンに。

―邪悪なる者あらば　その姿を彼方より知りて　疾風の如く邪悪を射抜く戦士あり―

青の装甲はさらに変化し、緑の物にかわった。緑のクウガ、クウガペガサスフォームだ。

「・・・っ」

ボウガンから二射発射される。すると、発射された空気弾は見事にガジェットに命中、封印エネルギーを受け、爆発した。

雄介はボウガンを元に戻し、赤のクウガ、さらに元の姿に戻った。
「あの。あなたは何者なんですか？」

金髪の女性は雄介に聞いた。

「あ、俺はこんな者です」

雄介がヴィータとその金髪の女性に渡したのは名刺。書いてあったのは・・・

『夢を追う男・2×××の技を持つ男。五代雄介』
と書いてあった。

「私はシャマル、この子はヴィータちゃん、でこっちはザフィーラです」

「すまなかったな。助かった」

雄介はザフィーラと呼ばれた青い狼を見ても驚かなかった。何故か？彼は灰色の人型狼になる仲間・・・ファイズ、乾巧を見た事があるからである。いや、あれは狼じゃなくてオルフェノクだ。

「・・・驚かないんですね」

「いや、俺の仲間に似たのがいたんで」
笑いながら言う雄介であった。

Chapter 1、出会い（後書き）

くオマケく

「あたしはお前をゆるさねー」

ヴィータは突然そう言った。

「ヴィータちゃん!？」

「だってあたしのアイゼンを取った後に、変なのに變形させたんだぞ! 認めるわけねーじゃん!!」

ヴィータの他の二人の一匹は苦笑いしたという。

「ごめん」

「ぜってーゆるさねーからな!!」

Chapter 2、世界の影（前書き）

中途半端ですが載せます

Chapter 2、世界の影

「シャルさん、どこ行くんですか」

「管理局です」

雄介は管理局なる組織の話を聞いた。

「へー、この世界にはそんなのがあるんですね」

「? ということですか。この世界って・・・管理局は次元世界を管理する組織ですよ」

「あ、いや。なんていうか、世界の概念が違うんですよ」

雄介は、自分がオーロラを使って世界を移動できる事、また自分の旅してきた世界には管理局なんて存在しない事を説明した。

「胡散くせー」

「ヴィータちゃん!」

雄介の説明に納得していないヴィータであった。

「それで、今管理局ではさっきの機械が悪事を働くから、それを壊してるってこと」

「はい」

「奴らは通称ガジェットドローン。アンチマギングフィールドAMFで魔法がある程度無効化され我らの攻撃が通じにくい。だから倒すのに苦労している」

ザフィーラが説明をした。

「おめーのは魔法じゃ無かったよな」

「うん。君たちは魔法? を使うの?」

「そうだよ。あたしたちは魔導師だ」

雄介はまた新しい物に出会えて喜んでいた・・・が、

『大変です! その世界に未確認生命体がいるです!』

「リン! 本当か!?」

急にシャルの前に出たモニターに幼い銀髪少女が写る。ヴィー

タはその少女に聞いた

『はいです！人型で理解できない言語を喋ってるです。あれ、そちらの方は？』

「五代雄介だよ」

そう言って、雄介はサムズアップした。

「一応、こいつも戦闘はできる。あたしらの知らない魔法を使うぞ」
『そうですか、私はリインフォース？（ツヴァイ）です！気軽にリインって呼んでください。・・・すみませんが、未確認生命体の魔力が計測できないので、手伝ってもらえませんか？』

リインがすまなさそうに雄介に言う。だが、ザフィーラが驚いてリインに質問をする。

「魔力が計測できないだと。それは本当か？」

『はいです。魔力が全く感知されませんが既に管理局員が何人も犠牲になってるです・・・』

雄介は、それをきいて未確認生命体事件を思い出した。

「わかった、俺も行く」

「ちゃんとしてこいよ！五代雄介」

ヴィータ達は超高速で空を飛んで行った。

「変身！」

雄介は変身し、ビートチェイサーと呼んだゴウラムを合体させ、ビートゴウラムにした。それに乗り、雄介はヴィータの後を追う。最高速度が570km/hもあるため、簡単に追いついた。無人世界であるためいくらでもスピードは出せる。三つの閃光が空を駆け、一つの鉄騎は地上で砂埃を上げながら走っていった。

「ビデェな、これは」
「本当に」

「ああ」

雄介達は、既に息絶えた管理局員たちが転がる中を歩いている。だが、雄介・・・クウガには見覚えのある死に方であった。そう、死んだ彼らの体から、

ー全く血が流れていないー

再構築されたクウガの世界で起きたグロンギによる殺人ゲーム、
リ・イマジネーション
ゲゲルの時に死んだ者たちと死に方と全くおなじであったのだ。

雄介はこの世界に大きな影が潜んでいるのを感じた。

Chapter 2、世界の影（後書き）

くオマケ

こんにちは。夢を追いつ愚者です。

キャッチコピーは

A next legend. A hero, KAMEN
IDER KUGA, returns.

ですね。英語・・・嫌いです・・・

それでは次回で会いましょう。

それではではさようならっ！

Chapter 3、グロング（前書き）

なんというか、もう、ggg。

雄介に金の力を使わせます・・・次回。

Chapter 3、グロンギ

「・・・クウガ（・・・クウガ）」

雄介が振り返ると、グロンギがいた。

「おい、こいつはなんなんだよ！」

ヴィータはアイゼンを構えながら言う。

「ギベ・クウガ（死ね、クウガ）」

グロンギは雄介に殴りかかるが、雄介は軽く避ける。

「チョグ・ギグパスゴ・グザバ？（調子が悪そうだな？）」

雄介は挑発するようにグロンギに言う。雄介はディケイド・・・門矢士にグロンギ語を教えてもらったためグロンギ語を話せるようになった。また、リント文字も理解できるようにもなった。

「おい、おめえら、何話してんだよ！」

「ギラガ・サバビゾ・ギビビダ？（今更、何をしに来た？）」

「ゲゲルザ（ゲームだ）」

「ラダバ・ゴセゾガ・ラブリデ・スンジャ・バギザソ！（まさか、俺を甘くみてるんじゃないだろ！）」

雄介はそう言ってグロンギに殴りかかった。雄介が見た事もないグロンギ。力は未知数だった。さっきはグロンギの方も油断していたから避けられたが、本気がどれくらいかはわからない。だから雄介は先手を打つ。

「ボソグ！（殺す！）」

そのグロンギは軽くかわして雄介を殴り飛ばした。

「がはっ」

雄介は軽く6メートルは飛んだ。

「はああああああ！」

ヴィータがグロンギに襲いかかるが、

「ゴラゲ・リントジャバギバ？ジャラザ！ビゲソ！（お前、リント

（ビリビリ使いたいけど・・・ここじゃ被害が大きいし、人がいる）
金のクウガを使えないため、タイタンフォームで応戦する雄介。
「・・・ねえ、ここからすぐに飛んでその管理局に行ける？」
「あ、ああ。転送を使えばいいんだが・・・少し時間がかかるぞ」
ザフィーラの答えに、すぐにはないにしろ転送できる事にほっとする雄介。

ジジツバチチジジ

アマダムから電気が走った。

Chapter 3、グロンギ（後書き）

くオマケく

もし、雄介が何も考えずにライジングマイティキックで出会いがしらにグロンギを倒していたら。

雄介「おりやあああああああああ！！！」

どごおおおおおおん（半径三キロ程度が爆発に巻き込まれる）

ヴィ「お、おまえ、いい加減に……」↑全身黒こげ

バタツ

シャ「……」↑返事が無い。ただの屍のようだ。

ザファイ「……オイ」↑ほぼ無傷

ヴィ「で、オイ！！ザファイラー!?」

ザファイ「俺は盾の守護獣だ。これくらいで倒れたりはしない」

……ザファイラー最強説浮上……

雄介「じゃ、次はアメイジングマイティキックを……」

ザファイ「ふっ、何度でも来い！！！」

・・・雄介&ザフィーラ、バトルマニア説浮上

まあ、雄介の性格的に、バトルマニアはないですね（汗）
それではではさよーならっ！

Chapter 4、空我くクウガくそして、倒すべき敵

「じゃ、そこから早く避難して!!」

アマダムから流れる電気はクウガを変質させていった。タイタンソードは金の装飾が付き、クウガタイタンはクウガライジンググタイタンに変わった。ザフィーラは獣の勘(?)で危険を察知した。

「ヴェータ、シャル。逃げるぞ」

「なっ!？」

「・・・わかったわ」

シャル達は転移の準備を始めた。

「クウガ!! (クウガ!!)」

「うをおおおおっ」

雄介は地面に落ちていた死んだ管理局員の物だと思われる剣状のデバイスを手に取り、二本目のライジンググタイタンソードに変化させた。そして、決して早いと言える速度ではないが、グロンギに向かっていった。

雄介は横目で転移が完了したのを見て、封印エネルギーを剣に乗せて攻撃した。

「ハァ!!」

―ダブルライジングカラミティタイタン―

他のライダーにそう言われた攻撃は、狙い通りグロンギの腹に吸い込まれていった。その感触を感じた雄介は顔を歪める。

「グ・・・ガザ・・・ハイパーショッカー・・・ダンザギ(ぐ・・・はぁ・・・ハイパーショッカー・・・万歳)」

そう言って、グロンギは爆発した。爆発した衝撃波は死んだ管理局員も襲ったが、雄介が彼らの前に立ち、剣で抑えることで傷一つ遺体につかなかった・・・

（ハイパーショッカーだって？・・・これは他の管理者達にも連絡しないと・・・）

雄介はこの世界にグロンギがいた事についても調べようと思った。そのためにも、力が必要だ。それも多ければ多いほどいい。

（一条さん・・・あのときみたいに組織と協力することになりそうです）

雄介の闘いは・・・始まった。

episode 1 戦士 終わり

Chapter 4、空我くクウガくそして、倒すべき敵（後書き）

ED「青空になる」

次回予告

雄介「プログラム？」

シグナム『そうだ、私たちヴォルケンリッターはプログラム、だから成長しない』

ヴィータ「認めたくはねーけど、こいつ強いぞ」

はやて「私は八神はやて、ていいます」

雄介「関西弁かぁ。翔太郎君たちの所の所長以来だな。聞いたの」

????『キーワードは、魔法・時空管理局・ハイパーショッカー・・・
・ビンゴだよ。五代雄介』

????『五代さん、僕たちもすぐに向かいます。それまで持ちこたえて下さい』

????『待ってろよ？シュッ』

雄介「機動六課？」

episode 2 仲間

Chapter 1、管理局の魔導師（前書き）

旅を続けている雄介の前に現れた、絶滅したはずのグロンギ。

彼は未だにゲゲルという殺人ゲームを続けていた。

そして、倒れる間際のハイパーシヨッカー万歳という声に秘められた意味とは？

episode 2 仲間

OP「SECRET AMBITION」

Chapter 1、管理局の魔導師

『それで、彼に出会ったのか』

「ああ」

雄介はさっきまでと違ってとても近代的な空間にいるが、その原理が全く分からないという状況に立たされている。

戦闘が終わった後に死んだ局員の遺体などを運んで、その後、時空管理局なる所に雄介は連れて行かれた。

目の前にあるモニター。

さっきまで本当に何も無かった所に突然現れたのだから、雄介はとても驚いた。

（フィリップ君を連れてきたら大変だろうな）

『うちの者が世話になった。私はシグナムという』

「え？俺は五代雄介です。いやあ、気にしないでいいですよ！当然の事をしたままですし、こんな小さな女の子に戦わせる訳にはいきませんよ」

『・・・ヴィータ、だそうだ』

「うっせえ！！たといこんなに小さくてもあたしは十年もはやてを守ってるんだ」

「十年もそのはやてって言う人を守ってるの！？」

雄介は驚いた。守る・・・と言えば、ファイズとバジンみたいな関係？いや、あれは巧君が迷惑そうにしていたな・・・なんて考えた。

「我らは夜天の書の守護騎士プログラム。夜天の主を守る存在だ」

「だから、私たちはずっと昔から存在していて、あなたよりも長く生きてるんです」

ザフィーラの説明に捕捉するシャマル。

「プログラム？」

『そうだ、私たちヴォルケンリッターはプログラム、だから成長しない』

「へー、そうなんですか」

―何が悲しくて私はアンタとコンビ扱いなのよ!!―

―あーいひゃーいやーああー

―フン! まあいいわ・・・―

「・・・元気そうだね、あの二人」

「さあな。アイツらは期待の星だからな」

「??」

外の芝生で戯れていたオレンジ色の髪の少女と青髪の少女を見て、雄介はヴィータに話しかけたが、ヴィータは雄介にはわからない事を言っ、雄介を混乱させた。

（はやての・・・いや、アタシ達の新部隊・・・機動六課の・・・な）

ヴィータは心の中でそう呟いた。

『それで、だ』

モニターに映っているシグナムは何か言いたそうな表情だ。

「えっと、なんでしょう」

『・・・模擬戦、しないか？未確認生物を一撃で倒したという事だけれしかしらんし、できれば・・・まあいい。頼めるか？』

「んーっと、手加減が出来ないかもしれませんが、それでいいです？」

『ああ、それでいいから頼む。ヴィータ、連れて来てくれ』

「シグナム」

ヴィータが通信を切ろうとしたシグナムを呼んだ。

「認めたくはねーけど、こいつ強いぞ」

『でも、もしかしたら民間協力者として・・・』

「でも、アレは絶対・・・」

『脅せば・・・』

「下手すりゃ、アタシ達も・・・」

「あの・・・お二人さん？」

何やら話しこんでいた二人に雄介は話しかける。

「あ？ ああ。わかった、すぐに連れて行く。・・・行くぞ」
「うん」

ちなみに、途中から空気になってたザフィーラとシャマルはいつの間にか消えていた。

がんばれ！ ザッフィー！ シャマル！

「へー、ここはいいところだね」

「アタシ達の自慢だ」

広い部屋に案内された雄介は、そこが市街地を想定した訓練室だとわかった。あたりはガレキや鉄パイプが落ちている。

（まあ、凄い早さで飛んできたボールに書かれた数字を読みとって素手でキャッチするよりは良いかな？）

とある世界のライダーの訓練の様子を聞いた事のある雄介にとってはこっちの方がいいと思ってしまった。

「あなたのバリアジャケットを見せてほしい」

「なんですか？ バリアジャケットって」

シグナムが言ったバリアジャケットの意味がわからなかった雄介。

「あの『クウガ』って姿の事だ」

「ああ、わかった。でもあれはバリアジャケットって言う名前じゃないです」

雄介はそう言った。

「じゃあ何だよ」

ヴィータが雄介に詰め寄る。

「仮面ライダー」

「「は？」」

「だから、仮面ライダーって名前。で、俺は仮面ライダーの中でクウガって呼ばれてる」

「では、あなたの他にもその『仮面ライダー』というのはいるのか？」

「ええ！ はい。 いますよ」

シグナムに詰め寄られてびっくりしながらも答える雄介。

「おなたはどういう力を？」

「うーん、古代の力・・・かな？」

雄介はアマダムに秘められた力についてシグナムに言うか言わないか迷った。

「どういう者が使えるんだ」

「まあ、心が清らかな人らしいよ」

雄介はアークルに記されていた言葉を言った。

「『心清く体健やかなるものこれを身につけよ　さらば戦士クウガとなるらん　ひとたび身につければ　永遠に汝とともにありてその力となるべし』・・・だってさ」

アークルを出現させて言う。

そして、いつものように両手を動かしながら叫ぶ。
「変身!!」

Chapter 1、管理局の魔導師（後書き）

オレンジ髪と青髪が誰かは分かります。

雄介がヴィータ達に出会ったのは彼女らがその後、六課の隊長になる人たちに出会った日です。

Chapter 2、模擬戦（前書き）

模擬戦です。

雄介が闘いを好きではないというのは分かっていますが、今後を考えると、模擬戦をさたほうがいいと思いました。

Chapter 2、模擬戦

「変身!!」

スイッチを押し、雄介はクウガへとその姿を変える。

「行くぞ!レヴァンティン!」

シグナムは胸にかけていた待機状態のレヴァンティンを起動させ、騎士甲冑を纏った。

「なるほど、それがバリアジャケットっていうんだ」

「いや、私たちベルカの騎士のこれは騎士甲冑という」
レヴァンティンを雄介に向けて言う。

雄介は両手を合わせた後、いつものように構えた。

「はっ」

「オリヤアアアア!」

ギイイイイイイイン

雄介の拳とレヴァンティンが衝突する。

「痛って〜」

「その程度か!」

雄介がひるんだ隙に、シグナムは斬り込む。が、

「超変身!!」

「なっ」

「はあっ!」

雄介は青のクウガに超変身。シグナムの背後に飛び、蹴りを放った。

キン

「・・・さっきより軽いな」

「あちゃー、青はやっぱ弱いな」

シグナムがレヴァンティンでガードすると、さっき生じた衝撃よりもはるかに小さい衝撃しか起きなかった。青のクウガはその素早さが強化される分、どうしても腕力などが赤に劣る。

「レヴァンティン」

【Panzergeist.】

シグナムはその髪と同じ魔力光で覆われる。

シャラン

雄介はその間に、地面に落ちていた鉄パイプをロッドに変形させた。

シャラン

「はっ」

キイン

「え？」

シグナムは雄介の攻撃を避けずに、甲冑だけで受け止める。

「今度は・・・」

ドキュ

レヴァンティンがカートリッジを一個ロードすると、その刀身は火に染まった。

「こちらの番だ！！」

「！？」

ドオオオオオオオ

「やったか！？シグナム！！」

攻撃を受けた雄介が飛ばされたが、どうなったのかは煙が立ち込

めている今では見えない。ヴィータがどうなったのかわからないのは当然だ。だが、

「いや、まだだ」

ザッ

「いてててて・・・いやあ、激しいっすね」
紫の姿に変えた雄介が煙から現れた。

「嘘だろ？今のは直撃だった筈だ！！」
ヴィータは驚く、が、

「・・・赤は万能、青は俊敏性、紫は・・・防御、耐久に特化か」
「お、わかりました？ちなみに、紫は腕力にも特化してますよ」
シグナムは今までの打ちあいから、クウガの色の特性を見抜いた。
「だが・・・」

シグナムは宙に浮かんだ。

「飛べないあなたに勝ち目は無い！！」
ヒュン！

ガシイイイイイン

「は、早っ!!」

「・・・これでも駄目か」

雄介に視覚できない速度で斬りかかったが、紫の装甲は打ち抜けない。

『クウガ・・・ゴウラム、使ウ』

雄介が腕力に物を言わせてシグナムを遠くに投げた後に、ゴウラムがやってきた。

「いや、でもさ、それじゃあ二対一だし」

『ソコノ少女モ、参加サセル』

「まあね、それがいいかも」

そう言った後、ヴィータに向かって雄介はこう言った。

「君も戦って二対二って事でいいかな？」
と

Chapter 2、模擬戦（後書き）

ゝオマケゝ

もし、雄介が容赦しない性格だったら・・・

雄介「・・・」

まるで最終戦を思わせるような感じで手を動かし、変身する。

・・・現れたのは、クウガアルティメット

シグ&ヴィ「（ぽかーん）」

雄介「フッ」

ボッ

雄介がシグナムに手を向けると、シグナムの体が燃える

シグ「うわっ!？」

シグナム、戦闘不能。

お・・・大人げねえゝ

てか、アルティメットって存在がチートですよね♪

勝てるのはディケイドコンプリートフォームか、小野寺クウガぐらいでしょうか？

ちなみに、この世界での強さ？というか、強度を記しときます。

ライジングアルティメット＞アルティメット＞金の紫＞キングラウザー＞ゆりかご＞紫のクウガ＞ライジング系＞ブレイラウザー（J）＞ブレイラウザー＞アームドデバイス一般Ⅱ赤のクウガ＞インテリジェントデバイス一般＞白のクウガ＞超えてはいけない壁＞生身の人間

一応、設定ではブレイラウザーは地球上の物は全て切れると言う事になっていますが、クウガはオーバーテクノロジーですねww

次回はクウガ&ゴウラム対シグナム&ヴィータをお送りします。多分一部で終わる予定です。

ちなみに、

ここでの一部Ⅱ小説一話

ここでの一話Ⅱ各エピソード

Chapter 3、超変身・・・（前書き）

Φ、Sにお気に入りで登録者数と評価が負けた・・・あつちはまだ三話なのに！！

Chapter 3、超変身・・・

「グラーフアイゼン!!」

ヴィータは首にかけていたミニチュアのハンマーを握り、叫ぶ。すると、服は赤のゴスロリになりその手にはハンマー、グラーフアイゼンが握られていた。

頭の帽子が可愛らしさを引き出させているように雄介は見えたが、あえて何も言わなかった。

ブウウウウウン

ゴウラムが雄介に近づいてくる。雄介は右手にビートチェイサーから取り出したエアガンを持ち、ゴウラムの足に掴まる。それと同時に、シグナムとヴィータは空を飛ぶ。

「へー、あれが五代雄介さんかあ」

「はやてちゃん。来ていたの？」

シャルは模擬戦の模様をモニターでみると、不意に後ろから呼びかけられた。シャルを呼んだのは彼女ら夜天の騎士の主、夜天の王である八神はやてだった。

「おお、五代さんの色が変わったで!? 銃もや!!」

モニターにはゴウラムに掴まっている紫のクウガが緑のクウガに変わり、さらに右手のエアガンが緑いろのペガサスボウガンに変わる様子が写った。

「さっきは鉄パイプを青い棒に変えてたわ」

「へー」

「出会ったときはバイクのハンドルを長剣に変えていたし」

モニターの雄介はボウガンを構え、ヴィータを狙っている。

ヒュン

雄介は一発撃って、赤のクウガに戻った。

（緑のクウガは辛いし連射が効かない・・・金の力を使えばいいんだけど）

変身制限がある緑は時間に注意しなければならない。だから、一々他の色に戻る必要がある。

（もつとも、“アレ”を使えば関係なく使えるんだけど・・・対人用じゃないし）

雄介が思い浮かべるのは究極の自分。つまり、凄まじき戦士・・・四肢には天を向いた角があり、腰の霊石の色は黒。その金の角は禍々しく四本になった姿。アルティメットフォームである。

確かに全ての色のクウガをすべての面において凌駕しているが、威力は計り知れない。たとえボウガンの封印エネルギーを込めていない空気弾であっても軽く人を殺しかねないし、あたり一面が焦土と化す。

先ほどの攻撃はヴィータの服の裾を掠るだけだった。

「アイゼン！」

【Schwalb fliegen.】

「うおおおおおらあああああつー！」

ヴィータの掛け声とともに、手には鉄球が現れる。そして、まるでテニスのサーブをするように、上からゴウラムに向かって鉄球を打った。

ヴウウウウウン

雄介は瞬時に青のクウガに超変身。掴んでいたゴウラムの足を放す。そして、ゴウラムは空高くに飛び、雄介は地面に着地。それと同時にさっきまで雄介とゴウラムのいた空間に赤く光る鉄球が通り過ぎていった。

（あれくらいは紫でどうにかなりそうだ）

雄介は高く跳躍。そして、雄介の指示通りに下に降りてきたゴウラムの足を掴む。

「そこだっ！レヴァンティン！！」

【Schlangerform】

レヴァンティンがカートリッジロード、そして、名前の通りに蛇のようになった刀身で雄介に攻撃する。

「っあ！！」

青の装甲は薄い。肩に切り傷ができる。

【Schwertform】

「とどめだっ」

シグナムはレヴァンティンをもとに戻し、斬りかかる。

そして、勝負がついた。勝ったのは

ジャキ

「俺の勝ちですね」

「・・・まいった」

雄介だった。その体は硬い装甲に覆われている。すなわち紫のクウガ。左手にはエアガンが握られており、右手にはタイタンソードが握られていた。そして・・・

とどめをさした筈のシグナムの手にはレヴァンティンは無かった。

「シグナムっ!？」

「超変身!はっ」

雄介は紫から緑に超変身。シグナムが負けたのに動揺しているヴィータの右手に空気弾を撃つ。

「うわああっ」

ヴィータはアイゼンを落とし、それを拾おうとしたが・・・

「で、俺の勝ちだね」

ヴィータの眉間にはペガサスボウガンの先が当てられていた。

ゴウラムの足に掴まっている雄介にヴィータは

「・・・アタシ達の負けだ」

と言った。

「うーん、シグナムもヴィータも負けたなあ」

「これほどだとは・・・」

モニターで決着がついたのをはやてとシャマルは見ていた。

「この人が私たちに協力してくれると嬉しいですが・・・」

「頼むだけ頼もうな、リイン。ガジェットだけじゃなくて他の未確

認生命体も出とるしな」

「はいです!」

はやての肩近くを飛んでいたリインフォース?はモニターを開く。
そこには・・・

戦っている茶色と灰色と黒色のどこか動物的な人型の生物が映し出されていた。

茶色の生物は雄介が倒したグロンギに似ており片腕を失っていた。灰色の方は青色の炎を出しているのがわかる。それに対し、黒色の方は全くの無傷だった。

「手掛かりは少ないもんな」

「はいです・・・この黒いほうの言った『新種のアギトか?』だけです。手掛かりは。魔力も全く計測できませんし」

「でも、この茶色に似た生物と五代さんは私たちの分からない言葉で会話したんやろ?」

「はいです。リインがモニターで見たです」

「私もこの目で見たわ」

三人は暫く考え込む。

「やっぱり、五代さんは色々知ってそうやな」

三人は、地面に降りて変身を解除した雄介をじっとモニター越しに見つめた。

Chapter 3、超変身・・・（後書き）

模擬戦は終わりましたが、ep2はまだ続きます。

Chapter 4、世界を管理する者達（前書き）

強引に終わらせた感じが否めない・・・
もしかしたら、いつか修正します

Chapter 4、世界を管理する者達

そこは、真っ暗な世界だ。周りには何も見えない……

茶髪の青年が現れた。童顔で、マフラーを巻いている。すると、その青年の後ろに地球が浮かんだ。

次に、三十歳を越したような男が現れた。彼の後ろにもまた、地球が浮かんだ。

更に、帽子をかぶった青年と髪の毛をクリップで止めた青年が現れた。また、地球が現れる。

「こんにちは」

「あ、こんにちは」

雄介は模擬戦を終え、シグナムに案内されてとある所に案内された。そこは多くの管理局員が打ち合わせに使う場所である。

そこでは先ほども、新部隊へのスカウトがされていた所だ。

「主はやて、お連れしました」

「ありがとな、シグナム」

「いえ」

シグナムは椅子に座ったはやてと呼ばれた茶髪の女性の後ろに立ち、ヴィータははやての隣に座った。

「ということは」

「私は八神はやて、ていいます。この子たちから話は聞いたと思うんやけど」

「はい。八神さん。俺は五代雄介って言います・・・関西弁かあ。

翔太郎君たちの所の所長以来だな。聞いたの」

雄介はいつもの名刺を渡した。そして、思い出すのはスリッパで

人を叩く癖のあるとある探偵事務所の所長だ。もともと、彼女は大阪人だが。最近、照井さんって人と結婚って聞いたなど、雄介は思い出していた。

「五代さん……か。では、あなたも地球出身ですか？」

「ん？……ここって地球じゃないの？」

「……もしかして、次元漂流者？」

はやては雄介をじっくりと観察している。

「え？違います。俺は自分の意思で気ままに“いろいろな世界”を旅しているんです」

雄介は目の前に置かれたコーヒーを飲んだ。

「……それは？」

「まあ、簡単に言うとなら世界って事ですね。だから、ここも地球と思っただけですが……」

先ほど、シグナム達に説明した時には、ここが地球だと思っていた雄介だったが、違っただけらしい。

「それで、何で俺を呼んだんですか？」

「えっとな、五代さんがこの子たちと出会った時、機械がおったやろ？」

世界の概念というかそれが全く異なっていたため、雄介は説明に苦労したがなんとか説明をし終わって本題に入った。

「ええ、まあ」

「でな、その機械が厄介でな、私たちはガジェット・ドローンと呼んどるんやけど……」

そう言うてはやては目の前にモニターを出した。

「これを見て」

「ん？」

そこには、先ほどの模擬戦の時とは違う服を着たヴィータと、シヤマルとザフィーラが写っていた。そして、彼女らの見ている方向には数体のガジェットがいる。

「よくみてろ」

ヴィータがそういうと同時に、画面のヴィータが魔法で攻撃をした。弾をアイゼンで打つ、さっきも使った魔法。

「これがな、あまりガジェットについて分からなかったころの映像なんやけど」

勢いがあつたヴィータの弾が、突如威力を失った。

「な！？なんで」

雄介と画面の中のヴィータが同じ反応をする。

「これが私が説明したAMFだ。魔法が使えなくなる」
ザフィーラがそう言った。

「・・・つまり、魔法じゃ攻撃が通用しにくいから魔法を使わない俺に協力を・・・？」

「そうです。お願い・・・できますか」

雄介は暫く考え・・・

「わかった」

と、答えた。

「でな、五代さんをお願いなんやけど」

「え？」

「変身？をあまりしないで欲しいんや」

「なんで？」

雄介ははやてに連れられ、魔力検査を終えた。検査結果によると雄介には魔力の源、リンカーコアがあるということがわかった。しかし・・・

「その能力、レアスキルどころじゃなくて、もしかするとロストロギアにされてしまう可能性があるんよ」

ロストロギアとは、オーバーテクノロジーとも言える物である。

雄介の体内に埋まるアマダムは充分にそれの中に分類されてしまう可能性をはらんでいる。

雄介にリンカーコアがあると先ほど言ったが、厳密には違う。ほとんどの魔導師のリンカーコアは胸にあるが・・・

雄介は、腰にあった。

しかも、それから無数の枝みたいなものが全身に伸びており、そのような物は検査員も見つた事が無いという。

リンカーコアと思われたもの、実はアマダムだった。だが、それは雄介以外はレントゲンを取らない限り、わからない。

「わかった！じゃあ、そういう事で！」

「ん。・・・えっと、本当にこういう部屋でええんか？民間協力者って言えばもっといい部屋を借りる事ができるんよ？」

「大丈夫大丈夫。だって、俺。クウガだし」

答えになってないと思ったはやては、口には出さなかったものの、ため息をついた。

ちなみに、短時間の間に雄介とはやては仲良くなった。はやての関西の血(?)のおかげか、雄介の人徳のおかげかはわからないが・・・

「じゃ、おやすみ」

雄介は質素なビジネスホテル風の部屋に入って行った。

そうそう、忘れていたが、ゴウラムとビートチェイサーはその部屋に搬入されていたらしい。雄介はそれを見て、びっくりしたというのは、また別の話だ。

真っ暗な世界にいくつもの“地球”が浮いていた。

それはほとんど同じで、違いが見当たらないほどだ。

『敵がまた、現れたみたいです』

逆光で見えなかったが、その声の主は他のその場にいる人々に言

った。彼の背後にも一つ、地球が浮いている。

『それって・・・大ショッカーなのか？最近皆の管理している世界に怪人が現れ始めたが・・・』

一人の長身の青年が聞いた。彼の眼はどこか寂しげで、服の胸元にはBOARDと書かれたワッペンが付いていた。

「そうだと思います。剣崎さん。もつとも、彼らはハイパーショッカーと名乗っていました」

先ほどの声の主が、その青年、剣崎に向かって言った。

『つたく、鬱陶しいな』

『本当に。乾さんも思った？』

『ああ。お前もな、城戸』

『酷っ』

不機嫌そうな男、乾と言うらしいと、城戸と呼ばれた男の声が響いた。

『まあ、そこは俺たちに任せな。フィリップ』

『ああ。翔太郎。さあ、検索を始めよう』

帽子をかぶった青年が隣の髪の毛をクリップで留めた青年に呼び掛ける。

『キーワードは、魔法・時空管理局・ハイパーショッカー・・・ビングゴだよ。五代雄介』

『・・・すごいね。いつも思うけど』

最初の声の主・・・雄介はそうフィリップに言った。

『でも、鍵がかかっていて閲覧ができない。まあ、何かがあるのは確かだよ』

『五代さん、僕たちもすぐに向かいます。それまで持ちこたえて下さい』

どこか弱そうで、でも、しっかりとした意思を感じさせる声で少年がそう言った。

『良太郎の言うとおりだ。待ってろよ？シュッ』

このなかで最年長に見える男がそう言う。

『おばあちゃんが言っていた・・・まずい飯屋と悪の栄えた試しは無い。と。俺もこっちが片付いたら行こう』

『じゃあ、待ってて下さいね。俺はAGITΩさえ片付けば行けるんで』

『僕はディケイド・・・門矢士を探してきます』

何故かエプロンを付けた男と、マフラーを巻いた、なにか間違っている(?)二人がそう言った。

『わかりました・・・じゃ、また』

雄介は、その場から消えた。

「なのはちゃん。この人が五代さんや」

「高町なのはです。機動六課のスターズ分隊の隊長をすることになってます」

「機動六課？」

「あ、忘れとった。機動六課っていうのは、私たちの新しい部隊の名前」

雄介は次の日、二人の女性をはやてに紹介された。一人は茶髪のサイドテール、先ほど自己紹介をした高町なのは。あともう一人は「ライトニング分隊の隊長をする、フェイト・T・ハラオウンです」金髪ストレートで赤い目を持つ、フェイト・T・ハラオウンだった。

「あ、俺は民間協力者の五代雄介です」

そして、雄介はいつものように名刺を渡した。

episode 2 仲間 終わり

Chapter 4、世界を管理する者達（後書き）

ED「星空のSpica」

次回予告

エリオ「ルシエさ〜ん、ルシエさ〜ん！」

はやて「三人でおんなじ制服は中学のとき以来やね」

なのは「うん。本日ただいまより、高町なのは一等空尉
フェイト「フェイト・T・ハラOWN執務官」
なのは&フェイト「両名とも機動六課、出向となります」

雄介「って、俺!？」

スバル「おおー！ー！なんか凄いですね！」

雄介「いや、俺の格闘技は我流だし」

????「・・・この感じっ」

????「アギト!?!? 待て、我々はお前の仲間だ」

????「え?」

次回、episode 3「六課」

えーっと、やっとepisode2終わりました。今回は特に長かったですね（汗）すみません。

毎回長さは2000字を目標にしていますが、今回は3000字行きました（滝汗）

で、前回、雄介が模擬戦に参加した事に疑問を持った方は多かったと思いますが・・・

すみません。作者の技量ではああするしか実力をなのはメンバーに分からせる事ができませんでした。

まず、実戦で雄介をあまり使わないのをコンセプトにしているため（というのも、アマダムは充分ログストアだから）、アマダムの持つ人体改造能力を、はやて達に危険と認識させる必要があったのです。

だってよ？普通に考えて、30トンの攻撃を出来る人間はおかしいじゃないですか（笑）

ま、まあ。これが理由です。批判があったらどうぞ

それではではさよーならっ！

Chapter 1、神の力の一端を握りし者（前書き）

雄介は物語のカギとなる女性たちに出会った。

彼は自らの力を見せ、管理局に協力することになる。

自分たちの目的を果たすために・・・

魔法少女リリカルなのはStrikerS空我く青空になるく、始
まります。

OP「仮面ライダーAGITΩ」

Chapter 1、神の力の一端を握りし者

「ルシエさくん、ルシエさくん！」

雄介が管理局に着いた頃、赤い髪の少年は人の名前を呼びながら探しまわっていた。

「管理局機動六課新隊員のルシエさくん？ いらっしやいませんか？ ルシエさくん！」

少年が探しているのはどこかの隊員らしい。

「はい！ 私です！ すみません、遅くなりましたあ」

そう言ってエスカレーターを駆け下りてくる人影・・・どうみても少女である。少年と年は近いだろうか？

「きゃっ!？」

「あっ！」

何かに引っ掛かったのか？ そのままその人影は倒れそうになった。そのまま落ちると思われたが・・・

【sonic move.】

少年の腕時計(?) がそう言った瞬間に、少年は残像を残しながら、少女に近づいて行った。しかし、エレベーターを駆け上がる速度が速すぎ、倒れないようにしようとすると、少年はバランスを崩した。だが、少年が自身の体を下にする事により、少女にけがはなかった。

「すみません」

「いえ、ありがとうございます」

すると、少女の鞆から小さな龍が出てきた。

「フリードもごめんね、大丈夫だった？」

「キューー！」

「龍の・・・子供？」

「あのー、すみませんでした。エリオ・モンディアル三等陸士ですよね？」

「あ、はい！」

少年・・・エリオはどもりながら返した。

「初めまして、キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。それから、この子はフリード・リヒ。私の龍です」

この時、長くコンビを組むことになるとは二人とも思っていなかった。

「このお部屋もやっと隊長室らしくなったですねー」

「そやね、ラインのデスクもちょうど完成してよかったなあ」

「えへへ、ラインにぴったりサイズですー」

部隊長室に可愛い声が響く。まるで妖精のような八神家の末っ子、ラインだ。

インターホンが鳴る。

「はい、どうぞ」

「失礼します」

扉から入ってきたのはなのはとフェイトだった。

「お、お着替え終了やな」

「お二人ともすっごく似合ってるですー」

なのは、フェイト、はやては三人とも同じ服を着ている。

「あはは」

「ありがとう。ライン」

「三人でおんなじ制服は中学のとき以来やね。まあ、なのはちゃんは飛んだり動いたりで教導の服のほうが多いかもしれんけど」

なのはは管理局の白い悪魔、エースオブエースなどの異名を持つ、エリートだ。

「まあ、事務仕事とか公式の場ではこっちってことで」

「さて、それでは」

「うん。本日、ただいまより高町なのはは一等空尉」

「フェイト・テストロッサ・ハラオウン執務官」

「両名とも機動六課出向となります。どうぞよろしくお願いします」

「はい、よろしくお願いします」

「お願いします！ですよ！」

そこで、また扉が開く。そこから出てきたのは眼鏡をかけた男性だ。懐かしそうに三人と話すあたり、知り合いなのだろう。

「フォワード四名をはじめ、機動六課部隊員とスタッフ。そして民間協力者の五代さんの準備が揃いました。今はロビーで待機させています」

「そっか。結構早かったなあ！ほんなら、なのはちゃん、フェイトちゃん！ばずは部隊の皆にご挨拶や」

「「うん」」

いざ、新部隊の結成へ・・・

「あれ？五代さんがいない？」

どこかでとある青年が呟いた。神の力の一端を担う男だ・・・そうとは思えないが。天の道を行く男とは犬猿の仲らしい（あちらから一方的に）

「あらゝ、俺、座標間違ったかな」

うんうん、と頷いてその青年は背後に現れたオーロラに入ると、

消えた。

「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長、八神はやてです」
壇上に上がったはやてを見て、雄介は驚いた。

（なんてシャキッとしているんだ）
と。

機動六課の隊舎。ここで今、機動六課設立の式が行われている。
雄介は何故か隊長陣の方にいたりするが。彼の服装はいつものラフな格好で、はっきり言うと、浮いている。

「平和と、法の守護者、時空管理局の部隊として事件に立ち向かい、人々を守っていくことが私達の使命であり、なすべきことです」

ふーん、と頷く雄介。どこまでもマイペースなのは長所なのか短所なのか・・・長所だと信じたい所だ。

「実績と実力にあふれた指揮官陣、若く可能性にあふれたフオワード陣。それぞれ、優れた専門技術の持ち主のメカニックやバックヤードスタッフ。全員が一丸となって事件へ立ち向かっていけると信じています。ま、長い挨拶は嫌われるんで・・・以上、ここまで。機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした！」

全く疲れない挨拶に好感を持ったのだろうか？職員は盛大な拍手を送った。

「そして、今回の機動六課に民間協力者として、五代雄介さんに協力をさせていただいています」

「どうも」

「彼は陰で皆を支えてくれるから、覚えておくように！」

実戦に出るとは言わないはやて。雄介の変身は、その特異性のせいで研究材料にされてしまう可能性があるからだ。彼が実戦に出る

のは対未確認生命体の時だけだとはやては考えている。

「みんな、笑顔でがんばりましょう！」

また盛大な拍手が起きた。

「あれー・・・また間違っちゃったかな？」

先ほどオーロラに消えた青年が別の場所で呟いた。

「うーん。一真君とくればよかったかも」

まわりを見渡しながら、雄介の座標を捜していく。

「あ、大丈夫ですか？その荷物持ちますよ」

「ありがとうねえ」

「いえいえ」

その後、通りすがりの老婆を助けた青年であった。そんな彼が彼女の家でお茶を飲んだのは別のお話し・・・そんなんでいいのか？

Chapter 1、神の力の一端を握りし者（後書き）

なのはSとS、第三話「集結」に相当する章です。

今回から一章がアニメの一話と考えていただけるとありがたいです。
ただし、オリジナル話、番外編は除いて。

??? 君。天然に書けたでしょうか？

・・・うん、書いてないね。

くもし一発で彼が雄介のところにたどり着いていたらく

雄介「みんな、笑顔でがんばりましょう！」

シャアアアア

??? 「あ、五代さん」

管理局員「侵入者だあああっ！！」

??? 「え？え？えええ！？」

数日後、食堂にて

??? 「おかわりあるよ」

雄介「て、????さん!？」

エリオ&スバル「おかわり!!」

??? 「はい」

よかったね。一発で行かなくて（笑）

彼の天然度合と、浮世離れした言動のおかげで、無事（？）釈放されましたw w

その後、食堂で飯つくってるしw w

次回は皆さん誰だかわかっているでしょうが、??? 君の戦闘に入れたらいいな。

それではっ

Chapter 2、機動六課の人たち（前書き）

割り込み投稿で、ライダー対談 ep1〜2を投稿しました。
更に、4コマ！ライダーの日常を公開です。

今回は原作のセリフをほとんど取り出しただけです。ああorz

Chapter 2、機動六課の人たち

「紅茶、できました」

「あらあら、手際がいいわね。あなたはこういうお仕事を？」

「俺はレストランで働いています！」

青年はおばあさんと話している。片手には紅茶のポットを持って。

「あら、ありがとうね」

「いえいえ」

こうして、昼下がりの時間は過ぎて行く・・・

「シグナム、本当にお久しぶりです」

長い廊下をフェイトとシグナムは歩いている。

「ああ、テストロッサ。直接会うのは半年振りか」

「はい、同じ部隊になるのは始めてですね。どうぞ、よろしく願います」

そう言って、ニコリと笑うフェイト。

「こちらの台詞だ。大体、お前は私の直属の上司だぞ」

「それがまた・・・なんとも、落ちつかないのですが・・・」

ため息交じりに話すフェイト。

「上司と部下だからな。テストロッサにお前呼ばわりも良くないか。敬語で喋った方がいいか？」

「・・・そういう意地悪は止めて下さい。良いですよ。テストロッサで。名前で」

「そうさせて貰おう」

ちよっと投げやりな感じでフェイトは言い、シグナムは答えが予想で来ていたかのように答えた。

「そう言えば、お互いの自己紹介はもう済んだ？」

廊下を歩いていると、急に振り返り、後ろをついてきていた機動六課フォワードメンバー四人に聞くのは。

右から、オレンジ色の髪の少女、ティアナ・ランスター。青色の髪の少女、スバル・ナカジマ。ピンクの髪の少女、キャロル・ルシエ。赤い髪の少年、エリオ・モンディアルだ。

「え？えっと・・・」

「名前と、経験やスキルの確認はしました」

どもるスバルの後、すぐにティアナが答えた。

「後、部隊分けとコールサインです」

エリオも加えてそう言った。

「そう。じゃあ、訓練に入りたいんだけど、いいかな？」

『ハイ！』

四人とも、すぐに姿勢を正して返事をした。

ヘリポート、ヘリのプロペラが回転する音が聞こえる。そこにいるのは、ヘリのパイロット、ヴァイス・グランセニックだ。

ヘリポートへの扉が開いた。

「あ！ヴァイス君。準備できたんか？」

入ってきたのはやとフェイトとリインだった。

「おう！準備万端！いつでも出れますぜえ！」

「うわあ、このヘリ、結構新型なんじゃない？」

フェイトが驚く。それはそうだ。

「JF704式、一昨年から武装隊で使用され始めた、新兵器です」

とのことらしい。はつきり言ってそっちの知識が無ければ全く驚かない程度だ。まあ、新しいかなと感じるくらいで。

「機動力も積載能力も、一級品ですよ！こんな機体に乗れるってなあ……パイロットとしては幸せでしてねえ」

「もう！ヴァイス陸曹！ヴァイス陸曹はみんなの命を運ぶ乗り物のパイロットなんですからあ！ちゃんとしてないと駄目ですよ！」興奮して話すヴァイスに指さして怒るリイン。はつきり言って、威厳なんて感じない。

「へいへい、わかってまさあね！リイン曹長」
なんと、こんな小さい体でリインは曹長みたいだ。

「八神隊長、フェイトさん。行先はどちらに？」

ヘリに乗り込み、ピッピッと、操縦機でモニターを操作した後、ヴァイスは二人に聞いた。

「首都クラナガン」

「中央管理局まで」

上ははやて、下はフェイトだ。

「了解！……行くぜ、ストームレイダー」

【OK. Take Off standby】

ヘリのプロペラは回転数を上げ、ヘリは空へ飛び立っていった。

「では、俺はこれで失礼しますね」

「ありがとうね。荷物を運んでもらって、更にご飯まで作ってもらっちゃって」

「いえ、俺が好きでやった事ですから」

その青年はそう言った。

「では、また会いましょうね」
「ええ・・・」

青年はだれも見えていない建物の陰に入るとオーロラを発生させて、消えた。

「・・・あの子、悪い人じゃなかったわ。でも、私の事を知らないって・・・」

青年と一緒にいた少し老けた女性はそう呟いた。

「津上君・・・か。響きが似てるわね、あの部隊の隊長と、エースオブエースの名前に・・・」

海辺で服装を整えるなのは。空にはカモメが飛んでいて、鳴き声が聞こえる。

「うわあ、綺麗だな」

「そうですね」

雄介はあつちをうろうろ、こつちをうろうろとしている。

「この海に浮かんでいるフィールドは何ですか？」

「訓練用のシュミレーターですよ」

「・・・これが？」

「あとで訓練の時に説明するので、待ってて下さいね」

「はい！」

いい笑顔で雄介は答えた。

「なのはさー！ーん！」

呼ばれて振り向くのは。見ると、一人の女性が片手に鞆を持ち、手を振りながら走ってくるのが見えた。

「シャーリー」

彼女はシャリオ・フィニーノ。グリフィスの幼馴染だ。機動六課のデバイス担当の女性である。フェイトの副官もしているらしい。すると、フォワード陣四人が走ってきた。フリードも一緒に飛んでいる。

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入っているから、ちょっとだけ、大切に扱ってね？」

四人はそれぞれのデバイスを持ち、眺めている。

（デバイスって、大きさが変わる奴だよね？フィリップ君はすぐに検索しそうだな）

「それと、メカニックのシャーリーから一言」

「えー、メカニックデザイナー兼、機動六課通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です」

そう言って、一礼する。

「みんなはシャーリーって呼ぶので、よかったらそう呼んでね」

「で、こちらは紹介したと思うけど、民間協力者の五代雄介さんです。とある理由で機動六課にいます」

「みんな、よろしく！」

『よろしくお願いします！』

Chapter 2、機動六課の人たち（後書き）

つーがみ、つがみ天然の子♪

と言う事で、津上、名前も登場です。次回こそ戦闘を入れたい。
では。

追伸…もしかすると、今回はチャプター5まで行くかもしれません。
もしかすると、ですが。

Chapter 3、頼門くAGITΩく共闘、そして・・・（前書き）

今回ちょっとお話を

Chapter 3、顎門くAGITΩく共闘、そして・・・

津上翔一は困惑していた。

次に転移したところで、いつもの気配を感じて走ると何故かアンノウンとそのほかの怪人が戦闘していたからだ。

「アンノウンとオルフェノク!？」

「!？アギトか」

翔一は腰にオルタリングを出現させていた。

「アギト、我々はお前の味方だ」

「どういう事だ」

翔一は困惑したまま、変身をする。

「変身!！」

ベルトの両サイドを押すと、オルタリングから光があふれ、翔一の体が見えなくなる。光が引くと、そこには黄金の龍をかたどった戦士、アギトがいた。

「今は手伝う！」

「ありがたい」

アンノウンと翔一は背中を合わせた。

「はあっ！」

戦闘が、はじまった。

「新人たちはさっそくやっているようだな」

「ああ」

「お前は参加しないのか」

場所は変わり、機動六課訓練場。初の訓練に向けて調整しているフォワードメンバーを見下ろしながら、ヴィータとシグナムの二人は話していた。

「四人ともまだまだよちよち歩きのひよっこだ。あたしも教導を手伝うのはもうちょっと先だな」

「そうか」

「…それに自分の訓練もしたいしき。同じ分隊だからな。あたしは空からなのは守ってやらなきゃいけない」

「頼むぞ」

「うん。…そういえば、シャルルは？」

「自分の城だ」

シャルルの城。それは医務室である。二人の助手を従えて、みんなをサポートするみたいだ。

訓練所には廃墟が広がっていた。シャーリーが設定してみたんだが、雄介はしきりに感動していた。

「うっわ。すごい」

どこからどう見ても本物である。

《よし、と。皆、聞こえる？》

なのはがモニター越しで聞いた。

『はい！』

これから彼ら、機動六課のフォワードたちが戦う事になるガジェットドローン。その持つAMFをどう攻略するのかがこれからの課題だ。

《それでは、スタート♪》

「くそっ、多いな…」

時間が立ち、優勢なのは翔一、アンノウンのコンビだが、数の多い怪人集団に苦戦していた。

「んっ」

ベルトの左側のスイッチを押し、オルタリングからストームハル

バードを取りだす。更に、右のスイッチを押して、フレイムソードを取りだす。

先ほどまで、フレイムフォーム、ストームフォームを使っていたが、一度に多くを相手にするのは、武器が多いほうがいいと判断したのだ。

三位一体の戦士、アギトトリニティフォーム。両手に持つ獲物で敵を切り刻んでいく。仲間のアンノウン、ハイドロゾアロードは電気の力を使って戦っている。だが、グロンギには当たらないようにだ。

「せい！やっ！」

剣を振り、薙刀を振るうたびに怪人は爆散していく。

「っ！」

ハイドロゾアロードの操る電気で、怪人の動きを制限する。二人のコンビネーションで怪人は瞬く間に減って行った。

「はああああああ………」

翔一はクロスホーンを展開、ライダーシュートの準備に入る。

「やああああっ！」

放った両足蹴りは最後に残ったグロンギのベルトに見事に当たり、爆発させた。

「助かった、アギト」

「何で人間の味方を……？」

「我々は元から人間の味方だ」

アンノウンを指揮する闇の力、彼をもとにして人間は生まれたと言われている。アギトの力を手に入れて神に近付いた人間は抹殺しようとも彼は基本、人間を愛していた。

「つまり、奴らの方が」

「ああ、過ぎた力を持っている。更に神に近づこうとしているのだ」すると、アンノウンの体が薄れる。

「また会おう、アギトの戦士よ……」

「あ、ちょっと!?!?………いっちゃった」

しばしば考え、翔一はオーロラを出現させ、その世界から消えた。

「はあ、はあ」

「ふう…」

一方、フォワード陣、本日の教導は終了したようだ。

「はい、今日はここまで」

『ありがとうございます!』

「みんな凄いよ」

「五代さんもお疲れさまでした」

「いやあ、俺はほとんどなにもやっていないし」

そう言っている雄介の体も他のフォワードたちと同じで、汚れていた。

「かなり走り込んだはずだけど…」

「だって俺、クウガだし」

キャロの疑問も当然。雄介は他のフォワードが訓練している間、体力強化のメニューとして走り込んでいたのだ。体にあるアマダムの影響か、どんなに筋肉繊維に傷がついても瞬時に治癒してしまうのだ。常人とは違う筋力、体力。正直雄介に訓練の必要を感じない。ティアナは雄介をじっと見つめていた。

「そうそう、今日、怪人の集団が現れていたんだって。で、それに気付いてほかの隊が急行したらしいんだけど、既に全滅していた…だから、もし怪人がここに現れてもいいようにしっかり休むんだよ」

「あれ、それも私たちの管轄じゃないんですか？」

「スバル、私たち機動六課は遺失物の搜索を主に行っているのよ。それは他の部隊がやること。わかった? バカ」

「うう、ティア酷い」

スバルはティアにそう言われ、泣き真似をした。

「で、五代さん。あとでちよつと…」

「はい」

「じゃ、解散」

『はい！』

Chapter 3、顎門くAGITΩく共闘、そして・・・（後書き）

アンノウンさんたちは仲間になりました。

ディケイドでは大ショッカーの仲間でしたが、普通に考えるとおかしいというのがわかると思います。

Chapter 4、翔一（前書き）

かなりお久しぶりです。すみません、遅くなりました。
もう一つのがこれと同じ時系列になるまで待っていたので…すみません。

まあ、あっちは少しグダグダしていますがね（笑）

Chapter 4、翔一

「これ、何だかわかります？」

「爆発のあと…」

雄介はなのはに連れられて、モニターを見ていた。

「局員では攻撃…それすら当たらず、かすり傷もつけない。そんな未確認生物を爆発させられるの、あなたしかいないんです」

「…」

「しかし、あなたはここにいました」

はやては雄介の隣で言う。

「誰がそれをしたのか、わかります？」

フェイトの質問に、雄介はしばし考え、答える。

「あるにはあるんだけど…」

『だけど？』

「…心当たりが多すぎてわからないです」

三人の女性、しかもとびきり美人に見つめられて、気まずかったのだろう。目をそらしながら答えた。

「心当たりが多すぎる…？」

「はい。クウガのほかにもライダーがいて、その人が倒した可能性もありますし、もしくはやつら同士で戦った可能性もあります」

「…そうですか」

「お」

「あ、はやて！」

はやてが雄介と話を終えた後、自分の家族達のもとへと向かうと食事をとっていた。

「ヴィータ！ 皆でお食事か？」

「はい！ 色々打ち合わせがてら」

シャルはそう答えて、はやてを見上げる。

「はやて、ご飯食べた？」

「お昼抜きやったから…もうお腹ぺこぺこや」

「それは大変です。急いで注文してきましよう」

「お茶、もらってきまーす！」

シグナムが席を立て、シャルもそれに続いた。

「おおきにな！」

「リインは？」

「ここ」

はやては持っていた鞆を空ける。そこにはすやすやと眠っているリインフォース？がいた。

「相変わらずよく寝るな、こいつは」

「ま、一生懸命働いてくれとるからな」

そしてシグナム達が帰ってきてはやては食事を始めた。

「中央のほうは、どうでしたか？」

「まあ、新設部隊とはいえ後ろ盾はそうとうしっかりしてるからな。そんなに問題はないよ」

今日、はやては中央でレリックについて…そして、最近発見されている未確認生命体について話をした。局員達は動揺し、機動六課の運用まで話が回らなかったのもあるが。

「後継人だけでもリンディ提督にレティ提督にクロノ君。んじやない、クロノ・ハラOWN提督」

「そして最大の後ろ盾、聖王教会と教会騎士団の騎士カリム。ま、文句の出ようはありませんね」

提督が三人。そして、一つの団体が後ろ盾にいる機動六課。文句なんて出るわけではないが…

「現場のほうはどうないや？」

「ん：なのはとフォワード隊は挨拶後朝から夜までずっとハードトレーニング。新人たちは今頃グロッキーだな。ま、全員やる気と負けん気はあるみたいだし、なんとかついてくと思うよ」

「うん」

でも、それだけの訓練を受けた雄介に疲労が見えなかったのにはやては疑問を覚えた。

「バックヤード陣は問題ないですよ。和気あいあいです」

「グリフィスも相変わらずしっかりやってくれます。問題ありませんね」

裏方もよく回っているようだ。

「：そうか。私たちが局入りして、かれこれ10年。やるせない、もどかしい思いを繰り返して、やっとたどり着いた、私たちの夢の舞台や。レリック事件をしっかりと解決して、カリムの依頼もきっちりこなして、皆で一緒に頑張ろうな！」

「うん！ 頑張る！」

「もちろんです！」

「我ら守護騎士。あなたと共に」

すると、リインの入っていた鞆がゴソゴソと動き始めた。

「んー。良いにおいがするですう」

「匂いで起きたか。いじきたない奴め」

「ふへへへ」

ヴィータの言葉にリインは笑って応える。

「皆でご飯中よ。リインちゃんも食べる？」

「食べるですう！」

「ほら。顔を拭け」

シャマルの言葉にリインは顔をさらに綻ばせ、シグナムがそんな彼女に布を被せた。リインは前が見えなくなってオロオロしている。

「私のわけたろな。ヴィータ。小皿取ってくれるか？」

「うん！」

小皿にのったトマトを持って、リインは口を開ける。
「わーい！　いっただっきまーす！」

「ふう、やっとついたかな？」

アギトの青年、津上翔一が機動六課の隊舎の前で呟いた。だが、
「みんな寝てるよね」

そう、今は深夜である。だが、

「テレパシーをつかってみよう」

彼は『アギト』に覚醒し、身についた能力の一つを使って雄介を
呼び出そうとした。…が、

「そのあなた。何者ですか？」

「うわ!？」

翔一が声のした方を向くと、六課の制服を着たなのはがいた。

「部外者の立ち入りは禁止ですよ。それに、最近は深夜に出歩いて
はいけないって報道があったの、知らないんですか？」

そう、ミッドでは多くの未確認生物による被害が起きている。で
あるため、深夜に出歩くのは危険という通告がなされていた。

「いえ、俺はちょっと五代さんに用事が…」

「五代さんに!？」

「あ、はい」

「あなたも、仮面ライダーなんですか」

そう聞かれて、翔一は言う。

「はい、俺は仮面ライダーアギト、津上翔一です！」

e p i s o d e 3 ～ 六 課 ～
終 わ り

Chapter 4、翔一（後書き）

ED「星空のSpica」

次回予告

ティアナ「仮面…ライダーって」

翔一「はい、どうぞ！」

雄介「スプーンの曲げ方教えて」

???「きやああああ!？」

翔一「変身！」

雄介「津上さん! 変身！」

なのは「…これが」

フェイト「仮面ライダーの」

はやて「力なんか？」

次回、episode 4「仮面」

遅くなった理由は前書きの通りです。すみません。

まあ、これからは今までよりも少しは更新されると思います。

できれば追撃はしないで……（泣）

次回は「ファーストアラート」の、空白の二週間のうちの数日（？）の予定です。
それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3043o/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS空我～青空になる～

2011年11月15日11時36分発行